

現代中国語場面文の語順について

——述語の意味特徴を中心に——

謝 平

要旨 現代中国語では、存在の場面に対して、少なくとも四つの語順で表現することが可能である。例えば、「玄関の外に人が立っている」と言うことに対して、“门外站着一个人”という「存在文」の語順（A語順）以外にも、“有一个人站在门外”（B語順）、“门外有一个人在站着”（C語順）、“有一个人在门外站着”（D語順）と表現することも可能である。本稿では、述語の意味特徴に着目し、A語順と比較しながら、B、C、D語順の生成条件を中心に分析した。その結果、述語に「存在義」があれば成立するA語順と異なり、ほかの語順は述語の意味への条件が「存在義」だけではないことがわかった。B語順の述語は、「附着義」も求められるが、本稿で分析したように、「附着義」を持つ動詞は三種類あり、それぞれの意味特徴によって、場所位置との整合性も必要である。また、C語順の述語は、「存在義」以外にもさらに「他動性」のない「状態義」も求められるが、「在」のないC語順では「他動性」の強い動詞が用いられても許容度が高くなることが明らかになった。さらに、D語順の述語は、「他動性」のない「状態義」あるいは「瞬間性」を持ちながら「結果残存義」を持つことが要請されることがわかった。

キーワード 存在 場面文 語順 述語 意味特徴

略谈现代汉语处所句的语序

——从述语的语义特征角度分析——

摘要 现代汉语中表达存在的处所句至少有四种。比如，针对“门外有一个人”的情况，我们可以用存在句的语序说成“门外站着一个人”（A语序），还

可以说成“有一个人站在门外”(B语序)、“门外有一个人在站着”(C语序)或者“有一个人站在门外站着”(D语序)。本文参考句型变换的相关研究,主要针对后三种语序的述语进行分析,考察在不同语序中述语的语义特征以及对句子生成所产生的影响。结果发现,与述语只需含有“存在”义即可成立的A语序不同,其他三种语序对述语的要求更多。B语序如其他研究所述,述语还需含有“附着”义,但本文还发现,“附着”义有三种情况,需使用与处所名词具有整合性的动词方可成立;而C语序的述语除“存在”义外,还需具有不含及物性的“状态”义,但不使用副词“在”的C语序,也可能选择使用及物性强的动词;D语序的述语部分需具有不含及物性的“状态”义或含有动作结果的“存留”义。

关键词 存在 处所句 语序 述语 语义特征

はじめに

現代中国語の場面文は¹⁾、少なくとも以下の例で示すように四つの語順になることが可能である。本稿では、例(1)~(4)で示す語順をそれぞれ「A語順」、「B語順」、「C語順」、「D語順」と呼ぶ。A語順はいわゆる「存在文」のことであり、描写対象を表す語句が述語²⁾の後に置かれ、対象の存在する場所を表す語句は文頭に置かれる。B、C、D語順は、いずれも描写対象を表す語句が述語の前に置かれるが、場所を表す語句の位置はそれぞれ異なる。

(1) 门外站着一个人。³⁾

(A語順:「P場所位置+A動作行為+着+T描写対象」)

[玄関の外には人が立っている。]

(2) (有)一个人站在门外。

(B語順:「T描写対象+A動作行為+在+P場所位置」)

1) 本稿では存在の意味が含まれるすべての文を「場面文」と呼ぶ。

2) 述語とは、本稿では各構文においてA動作行為を表す中心となる動詞と、それを修飾する部分のことを指している。

3) 出典のない例文は筆者による作例である。

[玄関の外に立っている人がいる。]

- (3) 门外有一个人在站着。

(C語順：「P場所位置＋T描写対象＋在＋A動作行為＋着」)

[玄関の外に人が立っている。]

- (4) (有) 一个人在门外站着。

(D語順：「T描写対象＋在＋P場所位置＋A動作行為＋着」)

[ある人が玄関の外に立っている。]

これまでの先行研究では、描写対象の「定性・不定性」や述語の特徴からA語順の生成可能な要因について研究されてきた。しかし、A語順の存在文に用いられる動詞であれば、ほかの語順に用いられても成立が可能であるというわけではない。本稿では、先行研究を踏まえながら、存在文以外の三つの語順における述語を中心に、それぞれの意味特徴及び語順の成立との関連性について考察する。

1. 先行研究

存在文(A語順)に用いられる動詞の特徴について、多くの研究が存在する。范方莲(1963:390)では、動詞の類別に着目し、助詞“着”と共起することのできない動詞や、“写、画”など以外の他動詞、感情動詞、授受動詞などは存在文に用いることができないと指摘されている⁴⁾。また、宋玉柱(1982, 1988)などでは、A動作行為を表す「動詞＋着」の意味特徴に着目し、

4) 以下に范方莲(1963:390)の原文を示す。

能进入的动词，意义上大都与事物的位置或移动有关。不能加“着”的动词一般不进入B段(包括全部能愿动词在内)。一般只作及物用的动词除了“写、画”一类以外，大都也不能进入B段。如“吃、喝、洗、刷、剪、扫、锄”等等。还有表示思想、感情、言语的动词，如“看、听、想、懂、知道、杀、怕、恨、爱、敲、哭、笑”等，表示给和取的动词，如“送、还、交、借、欠、偷、买”等都不能进入B段。

存在文を「動態存在文」と「静態存在文」に分類している⁵⁾。

しかし、多くの研究者にも気づかれているように、存在文の述語は、他動詞が用いられても他者への働きかけの意味がなくなる。例えば、范方莲(1963: 390)では次のように述べられている。

在一般情况下，“写、画”这些动词只作及物用，后面常带结果宾语。如“他写字”，“我画画儿”，不说“字写着”，“画儿画着”。但是，到了存在句中，它们和一般及物用法显然又不一样，而和存在句中其他动词的不及物用法相似。

[一般的な状況においては、“写、画”のような動詞は他動詞として用いられるだけで、後ろに結果を表す目的語が続く。例えば、“他写字”“我画画儿”と言うが、“字写着”“画儿画着”と言わない。しかし、存現文に用いられる場合は、他動詞の用法とは明らかに異なり、存現文に用いられる自動詞の用法と似ている。]

また、杨素英(1999)でも“写、画”以外にも、“游、爬、唱”などのような動詞は明らかに「意志性」をもつ非能格動詞あるいは他動詞でもA語順に用いられると指摘されている。

このような現象について、隋娜・王广成(2009)、王永利・韩景泉(2015)、李莉华・熊学亮(2020)などでは、もともと「意志性」をもつ動詞がA語順に用いられると、「非対格性」をもつ動詞になると指摘されており、任鹰(2005)では、存在・出現などの意味は構文によって付与されたものである

5) 宋玉柱(1982)によれば、“墙上挂着一幅画儿”の“挂”のような動詞は“静止的状态”を表しており、“天边游荡着几缕焰红的云彩”の“游荡”のような動詞は“动作行为”を表している。前者のような動詞が用いられる存在文は「静態存在文」であり、後者は「動態存在文」である。また、動詞の具体的な意味特徴について、聂云龙(1989: 96)では、「動態存在文」の動詞は「動作義」だけ持っており、「静態存在文」の動詞は、「状態義」と「附着義」を持っていると指摘されている。

と述べられている⁶⁾。

しかし、A語順に用いられる動詞はすべてほかの語順に用いることができるというわけではない。そのため動詞の特徴から、A語順がほかの語順に変換可能か否かについても多く議論されている。例えば、朱德熙(1962, 1982)では、「動作の持続」を表す動詞は、B語順に用いられないとされており、宋玉柱(1988)、聂文龙(1989)でも、「動態」を表す存在文は、B語順への変換が不可であると述べられている。一方、朱德熙(1981)、陆俭明(1993)などでは、A動作行為を表す動詞に「附着義」がない場合は、B語順に変換できないとされている。

C語順とD語順への変換可否についてはあまり研究されていないが、宋玉柱(1988)では、存在文を「静態存在文」と「動態存在文」に分類したうえで、次頁の表1で示すように、C、D語順への変換可否について言及している。また、聂文龙(1989)では、A語順からB、C語順への変換状況も示されている(表2)。

表1と表2からわかるように、宋玉柱(1988)と聂文龙(1989)の意見が全く同じであるというわけではない。両者とも存在文を大きく「静態存在文」と「動態存在文」に分けているが、下位分類はそれぞれ異なる。宋玉柱(1988)では、「静態存在文」が三種類に分けられており、「動態存在文」は下位分類されていない。一方、聂文龙(1989)は、「静態存在文」を二種類に下位分類しており、「動態存在文」を三種類に分類している。さらに、宋玉柱(1988)では動態存在文はC語順に変換できないとされているが、聂文龙(1989)では変換が可能とされている。

6) 任鹰(2005: 38)では次のように述べている。

特定の句式框架会使动词产生一种临时性质的附加义，这种附加义不能被看作动作本身的意义，供用句中的动词所具有的“供用义”、存现句中的动词所具有的“存现义”，都属于这种临时性质的附加义。动词脱离句式，这种附加义便会随之消失，因此应将其“归因于句式”。从这个角度来看，是句式赋予动词以意义，句式规定动词的语义实现状况。

表 1

NP ₁ + 動 + 着 + NP ₂ (A 語順)		(有)NP ₂ + 動 + 在 + NP ₁ (B 語順)	NP ₁ + (有) + NP ₂ + 動 + 着 (C 語順)	(有)NP ₂ + 在 + NP ₁ + 動 + 着 (D 語順)
静態 存在文	a 類	(5) 床上躺着一个人 [ベッドに人が横になっている]	+	+
	b 類	(6) 墙上挂着一幅画 [壁に絵がかかっている]	+	-
	c 類	(7) 墙上写着两个字 [壁に二文字が書かれている]	+	-
動態 存在文	(8) 大街上跑着两辆汽车 [大通りに二台の車が走っている]	-	-	+

出典：宋玉柱（1988: 88）の表に基づいて作成。

凡例：「+」は、そのパターンでの生成が可能であることを表す。また「-」はそのパターンの生成が不可能であることを表す。

表 2

NP ₁ + V + 着 + NP ₂ (A 語順)		(有)NP ₂ + V + 在 + NP ₁ (B 語順)	NP ₁ + (有) + NP ₂ + 在 + V + 着 (C 語順)	
静態 存在文	“坐” 類	(9) 床上躺着一个小女孩。(聂文龙 1989: 102) [ベッドに子どもが横になっている。]	+	+
	“贴” 類	(10) 门上挂着一条绿纱帘。(聂文龙 1989: 102) [玄関に緑のカーテンがかかっている。]	+	-
動態 存在文	移動類	(11) 屋子里飞着一只蜜蜂。(聂文龙 1989: 96) [部屋に蜂が飛んでいる。]	-	+
	非移動類	(12) 夕阳中摇曳着羽毛草。(聂文龙 1989: 100) [夕暮れの光の中に、ハネガヤ草が揺れ動いている。]	-	+
		拡散類	(13) 草原上弥漫着晨雾。(聂文龙 1989: 100) [草原に朝の霧が立ち込めている。]	-

出典：聂文龙（1989: 103）の表に基づいて作成。表中の例文も聂文龙（1989）から引用した。

凡例：表 1 に同じ。

宋玉柱 (1988) で挙げられている例 (5)~(7) は、同じ静態存在文なのに、何故ほかの語順への変換可否が異なるのであろうか。また、同じ移動を表す「動態存在文」である例 (8) と例 (11) に対して、両研究の意見は何故異なるのであろうか。以下では、先行研究を踏まえながら、各語順の生成条件として述語の意味特徴を中心に考察してみる。

2. B 語順 (「T 描写対象 + A 動作行為 + 在 + P 場所位置」)

2.1 「A 動作行為 + 在」の「附着義」について

朱德熙 (1981: 15) では、「挂、贴、插、戴、写、躺、住、漂」などのような動詞が用いられる場合は、A 語順と B 語順のどちらにしても意味に変わりはなく、これらの動詞には、「状態義」と「附着義」という共通の意味特徴を持っていると指摘されている。さらに“浇、吐、落(là)”などのように「状態義」がない動詞は A 語順に用いられず、“开、拉、关”などのように「附着義」がない動詞は B 語順に用いることができないとしている。陆俭明 (1993) でも、A 語順に用いられる動詞の中で、「附着義」のある動詞は、B 語順に変換することができる⁷⁾と述べている。しかし、「附着義」とは具体的にどのような意味を指しているのであろうか。朱德熙 (1981: 11-12) では、“针扎在手上”を例として、以下のように B 語順は多義文になる場合があると指摘されている。

例如“针扎在手上”这个句子如果是在跟针灸有关的某种语言环境里说的，“手上”指针所在的位置，(中略)如果说这句话的语言环境与针灸不相干(譬如说，做活的时候不小心，让针扎了手)，“手上”指的是“扎”这个动作的趋向(针扎在手上)，(後略)

[例えば“针扎在手上”という文は、鍼灸の話題と関係する文脈では、“手上”は針の所在の位置を指しており、(中略)もし鍼灸の話題と関係

7) 陆俭明 (1993) の第四章の〈变换分析的运用〉と第五章の〈语义特征分析的运用〉を参照。

ない文脈であれば（例えば、仕事の時にうっかりして手が針に刺されてしまう場合）、「手上」は“扎”という動作の方向（針扎在手上）を指す、（後略）]

朱徳熙（1981）のこの指摘によれば、“扎”などのような動詞は、B語順では、「物の存在位置」を示す意味機能だけではなく、「動作の方向位置」を表す意味機能もある。しかし、以下の例のように文脈が提示されている場合は、「多義」にならない。

(14) a. 心里一哆嗦，针扎在了手上。（BCC）

[心が震えて、針が手に刺さってしまった。]

b. 婴儿脉管细，吊针要扎在头上，……（CCL）

[赤ちゃんの脈管が細いので、点滴の針は頭のほうに刺すべきだ。]

例(14a)の“针扎在了手上”は、針が手に刺されている状態、つまり動作の行った結果として針の存在する位置を表している。それに対し、例(14b)は、“扎在”の前に“要”があり、“头上”は針の刺すべき位置であることを表している。前者は実際に動作を行った結果を表し、後者は想定した動作結果を示しており、いずれも動作の終了時にある位置や場所に付いている状態を表すと考えられる。

B語順に用いられる“扎”のような他動詞は、B語順では動作終了時に対象がある位置に付くような「附着」状態を引き起こす要因となる具体的な動作を表している。このような「附着義」を持つ他動詞は、“扎”以外にも“贴、挂、写、画、放、种”などが挙げられる。

また、次の例(15)～(17)で示すように、動作終了時に、ある場所に附着することを表す自動詞もある。

(15) 雪落在中国的土地上，……（BCC）

[雪が中国の大地に降っている……]

(16) 倾斜的雨丝飘在树叶上，飘在路面和他们的伞上，给他们的行走增添了一种情调。（BCC）

[斜めに降っている雨が木の葉に落ち、路面と彼らの傘に降りかかった。彼らの散歩にいい雰囲気醸し出している。]

- (17) 细雨飘洒在我脸上。(BCC)

[雨が私の顔にかかってくる。]

例(15)の動詞“落”、(16)の“飘”、(17)の“飘洒”は、いずれも描写対象が移動している状態を表しており、その後ろの“在”は、描写対象が最終的に止まる場所や接触面を表す名詞句を導く機能を持っている。このような動詞はほかにも“滴、刮、降、下、降落、踩、跨、踏、跳”などのような自動詞が挙げられる。

一部の自動詞は、動作が行われると同時にある位置や場所に附着している意味を含んでいる。

- (18) 小船浮在岸边，竹篙横在船上，倪二呢？(BCC)

[小舟が岸辺に浮かんでいて、竹竿が船の上に横たわっている。しかし倪二はどこにいるのだろうか。]

- (19) 一只小苍蝇趴在她的前额上，他轻轻地挥一下手，把它赶走了。(BCC)

[一匹の小さなハエが彼女の額にへばりついていて。彼は優しく手を振って、それを追い払った。]

- (20) 刚从窝里飞出来的一群野鸭子游在江水上，……(BCC)

[巢から飛んできたばかりのマガモたちが川で泳いでいる……]

例(18)の“浮”、“横”や、例(19)の“趴”、例(20)の“游”のような自動詞は、いずれも動作・状態自体に附着の意味要素が含まれている。また、“走、跑、站、坐、蹲、躺、睡”など一部の意志性を伴う自動詞も、このような附着義を持っている。

さらに、上記の「動作の終了時に附着する」と「状態・動作と共に接触する」の状況以外にも、ある場所・空間内で続いている動作や状態を表す「附着義」がある。

- (21) 有几百个人躲在坚固的防空壕里，……(BCC)

[何百という人が堅固な防空壕に隠れていた……]

- (22) 鸟儿飞在空中，蛾子藏在叶中，……(BCC)

[鳥は空の中で飛んでいて、蛾が葉っぱの中に身を隠している……]

- (23) 一股淡淡的香味弥漫在清冷的空气中，直冲鼻膜儿。(BCC)

[淡い香がひんやりした空気の中で漂っていて、鼻の中に滲み込む。]
上記の例の「V + 在」に続く名詞句“坚固的防空壕里”、“空中”、“叶中”、“清冷的空气中”は、いずれも描写対象の接触面ではなく、動態が起こる空間・場所を表している。

従って本稿では、B語順に用いられる動詞の「附着義」は、以下の三つの状況に分けられると考える。

①動作終了時に対象がある位置や場所に残っている

他動詞：“貼、挂、放、摆、种、扔、戴、写、挖、画、刻”など

自動詞：“踩、踏、跨、跳、滴、落、降、下、刮、飘、飘洒、降落”など

②動作行為・状態が続いていると同時に、対象がある位置や場所に接触している

自動詞：“走、游、跑、站、坐、跪、趴、蹲、躺、睡、停、靠、开、长、流、漂、浮、漂浮”など

③ある空間や場所内で対象の動作・状態が続いている

自動詞：“躲、藏、留、飞、飘、散发、弥漫、笼罩、回响、聚集、集合”など

2.2 場所位置との整合性

宋玉柱 (1988) では、以下の例 (8a) を B 語順に変換できない用例として挙げられているが、実際では、例 (24)、(25) で示されているように、“跑”は B 語順にも用いられる。

(8) a. 大街上跑着两辆汽车。(宋玉柱1988, 再掲)

[大通りに二台の車が走っている。]

⇒ b. *有两辆汽车跑在大街上。

(24) 那几个大一些的孩子卫队似的跑在前面。(BCC)

[あの年上の子どもたちは護衛のように前のほうで走っている。]

(25) 我们的车子跑在路上, 常常遇到搭便车到基地过周末的战士。(CCL)

[私たちの車は道で走っていて、時々便乗して基地で週末を過ごすとする兵士たちに会う。]

例(24)の描写対象である“那几个大一些的孩子”は、有生性を持っている。また、例(25)の描写対象である“车子”は、もともと無情物であるが、修飾語は“我们”という意志性を持つ有情物である。動詞“跑”は主に有情物に用いられると思われるが、車の普及と共にB語順での用例も少なくない。

(26) 325车跑在最前边，因道路泥泞，经过十多分钟，才爬上山头。(BCC)

[325班の戦車が一番前に走っていたが、道路がぬかるんでいるため、十数分かかってやっと山頂に登った。]

(27) 列车跑在马路上 (新聞記事のタイトル) (BCC)

[列車が大通りを走る]

また、聂云龙(1989)、齐沪扬(1994)などでも、以下のような例を挙げながら、動態の意味を持つ動詞はB語順に用いることができないと指摘されている。

(28) *一只蜜蜂飞在屋子里 (聂云龙1989, 齐沪扬1994)

(29) *雪花飘在窗外 (齐沪扬1994)

しかし、以下のような用例もみられ、B語順は動態を表す動詞が用いられるから成立しないのではとはいえない。

(30) 两只小蜜蜂呀，飞在花丛中呀，飞呀，飞呀…… (CCL)

[二匹の小さい蜂は、花々の中で飛んでいる。飛んでいて、飛んでいて……]

(31) 雪花飘在脸颊上，他觉得凉沁沁的好舒服，…… (CCL)

[雪のひとひらが顔にかかって、ひんやりとしていた。彼はとても気持ち良く感じている……]

動詞“飞”は、ある空間(“空中”、“天上”など)で動作が続く状態になることしか表さないが、“飘”は終着時にある場所(“山上”など)に附着する状態になることを表すとともに、ある空間(“上空”など)で動作が続く状態になることも考えられる。両者とも2.1で述べた「附着義」を持っているため、B語順に用いることができるはずであるが、何故例(30)と(31)は成立できるのに対し、例(28)、(29)は成立できないのであろうか。

上記の例を比べればわかるように、両者の異なる箇所は文末の場所を表す

名詞だけである。例(30)と例(28)はいずれも蜂の飛んでいる場所を述べようとしているが、前者は“花丛中”であり、後者は“屋子里”である。蜂の習性を考えれば、花の周りなどで飛ぶのは一般的であり、部屋の中で飛ぶのはまれなことである。一方、例(31)、(29)の描写対象はいずれも“雪花”である。“雪花”は最終的に必ず落ちてくるということになるため、後ろの動詞“飄”は、「舞う」より「舞い落ちる」という意味として捉えられる傾向がある。即ち、最終的にある場所に落ちるという状態になり、文末の場所名詞はその落ちて「附着」する具体的な場所を表すものが要請される。例(29)の“窗外”は範囲だけ表しており、雪の舞い落ちる具体的な場所や接触面を表していないため、違和感を覚えてしまう。

つまり、A語順と異なり、B語順の述語は、描写対象の常態や習性との整合性が必要であるだけでなく、その「附着」の意味特徴と場所位置との整合性も求められている。そのため、「描写対象」「動作行為」「場所位置」が同じでもB語順とA語順は必ずしも互換できるというわけではない。

(28)' 屋子里飞着一只蜜蜂。

[部屋に一匹の蜂が飛んでいる。]

(29)' 窗外飘着雪花。

[窓の外に雪が舞っている。]

(30)' 花丛中飞着两只小蜜蜂。

[花の群れの中に二匹の蜂が飛んでいる。]

(31)' *脸颊上飘着雪花。

B語順では不自然な文である例(28)、(29)をA語順に変換すれば、例(28)'、(29)'のように自然な表現になる。一方、B語順では適格な表現である例(30)、(31)をA語順に変換した場合、前者は適格な表現になるが、後者は不自然な表現になる。例(28)'～(30)'の文頭に置かれている名詞(P_{場所位置})は、いずれも存在対象の動きが発生可能な場所であり、述語との整合性を取っている。それに対し、例(31)'の文頭に置かれている“脸颊上”は、“雪花”の舞う場所として不可能であり、述語との整合性がないため、不適格文になってしまう。

上記の説明でわかるように、A語順の述語は主に対象の「存在時の状態」を表しており、B語順の述語は、主に場所に「附着時の状態」を表す。そのため、両語順はP場所位置に対する整合性の特徴も異なる。B語順のP場所位置は、T描写対象の常態や習性と一致するものだけでなく、述語部分の「附着」を表す意味と合致するものでなければならない。一方で、A語順のP場所位置は、T描写対象の「存在時の具体的な状態」を表す意味と合致しなければならない。

3. C語順（「P場所位置＋T描写対象＋在＋A動作行為＋着」）

C語順は、宋玉柱（1988）では「NP₁＋有＋NP₂＋動＋着」と表記されているが、聂文龙（1989）では「N_p＋（有）N＋在（副）＋V＋着」と表記されている。“门外有一个人（在）站着”のように、動詞の後に常に“着”があつて、動詞の前に“在”を伴う場合もあり、「P場所位置＋T描写対象＋（在）A動作行為＋着」という形で用いられている。

また、“在”と“着”の共起について、尚新（2009:167）では、「静態」を表すことが多いと指摘されているが、宋玉柱（1988）、聂文龙（1989）で挙げられている例からわかるように、すべての静態存在文に用いられる動詞は必ずしもC語順に用いられるというわけではない。以下では、“在”と“着”の共起に着目し、A語順との互換関係からC語順の意味特徴を考察する。

3.1 A語順から変換の可否について

A語順からC語順への変換可否について、宋玉柱（1988）、聂文龙（1989）などでは、以下のような具体例が挙げられているが（次頁の表3、4参照）、その変換可否の理由については分析されていない。

静態存在文について、宋玉柱（1988）では三種類に分けられており、聂文龙（1989）では二種類に分類されているが、C語順への変換可否についての意見はほぼ同じである。両研究では静態存在文に用いられる動詞は一部C語順に用いられるが、一部は用いられないとされている。例えば、“躺”はC

語順に用いられるのに対し、“挂”と“写”のような動詞はC語順に用いられないとされている⁸⁾。

表3

NP ₁ + 動 + 着 + NP ₂ (A語順)		NP ₁ + (有) + NP ₂ + 動 + 着 (C語順)	
静態存在文	a類	(5) 床上躺着一个人	+
	b類	(6) 墙上挂着一幅画	-
	c類	(7) 墙上写着两个字	-
動態存在文		(8) 大街上跑着两辆汽车	-

(※表1の一部を再掲)

表4

NP ₁ + V + 着 + NP ₂ (A語順)		NP ₁ + (有) + NP ₂ + 在 + V + 着 (C語順)		
静態存在文	“坐”類	(9) 床上躺着一个小孩。	+	
	“贴”類	(10) 门上挂着一条绿纱帘。	-	
動態存在文	移動類	(11) 屋子里飞着一只蜜蜂。	+	
	非移動類	動揺類	(12) 夕阳中摇曳着羽毛草。	+
		拡散類	(13) 草原上弥漫着晨雾。	+

(※表2の一部を再掲)

動態存在文に用いられる動詞については、両者の意見が異なる。宋玉柱(1988)ではC語順に用いられないとされているが、聂云龙(1989)では、動態存在文に用いられる動詞を「移動類」(例(11))、「非移動類」(例(12)、(13))に分けられており、いずれもC語順に用いられるとされている。

上記の例(5)~(13)の述語の中心動詞は、すべて「持続性」を持っており、“在”と“着”の両方とも共起ができるが、C語順にすると許容度が異なる。その理由は、“在+V+着”の前のT描写対象が動作行為の持ち主であるか否かが重要なポイントであると考えられる。例えば、例(5)、(9)の描写対象である“一个人”、“一个小孩”は、いずれも“躺”という動作行為を行う主体

8) “挂”と“写”はC語順に用いる用例もある。その許容度については3.2を参照。

である。それに対し、違和感のある例(6)、(10)の“画”、“绿窗纱”は、“挂”という動作の主体ではなく、動作行為の対象であり、例(12)の“两个字”も“写”の動作主ではない。一方、聂云龙(1989)で挙げられている変換可能な例(11)、(12)、(13)のT描写対象である“一只蜜蜂”、“羽毛草”、“晨雾”は、いずれも動作・状態の持ち主である。

宋玉柱(1988)では、動態存在文がC語順に変換できない例として“跑”を取り上げているが、以下の例で示すように、C語順での使用例も多くみられる。

- (32) 一群人从路的这边要到那边去，路的那边也有一群人要到这边来，但是在路上有汽车跑着，……(BCC)

[道路のこちら側から反対側に行こうとする人たちと、反対側からこちら側に来る人たちがいたが、道には車が走っている……]

- (33) 山径上两个顶着书包的孩子在跑着、跳着、互相追逐着。(BCC)

[山道にかばんを頭に載せている二人の子どもがはしったり、跳んだり、互いに追いかけていたりしていた。]

例(32)、(33)で示されているように、“跑”は持続性を持っており、副詞の“在”とアスペクト助詞“着”との共起が可能であり、さらに述語の前のT描写対象は、動作の持ち主であるため、C語順に用いられると考えられる。

C語順に用いられるか否かのポイントは、A動作行為を表す動詞が副詞の“在”とアスペクト助詞“着”との共起が可能かどうかだけではなく、T描写対象がその動作の主体または状態の持ち主であるかどうかも重要になる。

3.2 許容度及び“在”との共起

3.1で分析したように、C語順では、T描写対象は動作・状態の持ち主であることが求められており、例(6)、(10)の“挂”と(7)の“写”などのような他動詞は、動作の持ち主の存在を表すことができないため、C語順に用いられにくい。しかし、“在”のない形式であれば許容度が高くなる場合もある。

- (34) a. 安妮还隐约看到，纸上有字写着。(BCC)

[紙に字が書かれているのを、アンニーはぼうっと見た。]

- b. *……，紙上有字在写着。
- (35) a. 茶馆里有汽灯挂着，比较亮。(BCC)
[喫茶店にガスランプがかかっており、かなり明るい。]
- b. *茶馆里有汽灯在挂着，……

例 (34a) の“写着”と (35a) の“挂着”の前に“在”を加えると、例 (34b)、(35b) で示すように許容量が低くなってしまう。C語順では“在”との共起ができない他動詞はほかにも“摆、放、贴、刻”などが挙げられる。

- (36) a. 朝南的窗下有一张八仙桌摆着，……(BCC)
[南向きの窓の下に八人用のテーブルが設置されている……]
- b. *朝南的窗下有一张八仙桌在摆着，……
- (37) a. 这坟上总有一朵花儿放着。(BCC)
[このお墓にはいつも一輪の花が置かれている。]
- b. *这坟上总有一朵花儿在放着。

- (38) a. 现在外面的人恐怕都知道你受了伤，大街上甚至有布告贴着，详细地说明你受伤的经过，以及逃跑的路线。(BCC)
[おそらくお前が負傷したことは皆に知られている。街にも布告が貼り出されている。そこにはお前が負傷した経緯と逃走したルートが詳しく書かれているからな。]
- b. *……，大街上甚至有布告在贴着，……

尚新 (2009)、方梅 (2011)、祝东平・祝郝 (2012) など、多くの先行研究でも指摘されているように、「V+着」は主に「状態の持続」を表しており、「在+V」は「動作の進行」を表す。また、“在”と“着”の共起については、石毓智 (2006: 22) などでも指摘されているように、動作行為が現在でも、これからも続くという意味を表す⁹⁾。例 (34)~(38) に用いられる動詞“挂、写、摆、放、贴”は、いずれも働きかけた結果として何かが残るとい動作行為を表す他動詞である。これらの動詞の共通性は、対象に働きかけるとい

9) 石毓智 (2006: 22) の原文は以下の通りである。

“在”和“着”共用，表示动作行为在现在这段时间的持续，而且将延续到未来。

う他動性が高いことである。つまり、これらのような他動詞の前に「動作の進行」を表す“在”を加えると、働きかけを表さない「状態義」より、その他動性がより明確になるため、「在＋A動作行為」の前に動作の持ち主を示すことが必要になってしまい、動作の対象や結果を表すT描写対象を示すと違和感を覚えてしまう。

4. D語順（「T描写対象＋在＋P場所位置＋A動作行為＋着」）

D語順はT描写対象が主語であるとともにA動作行為の持ち主であり、また、動詞の前の「在＋P発生場所」は動作行為の行う場所を表しているため、最も一般的な能動文の基本語順に近い。

(39) a. 可是大衫和帽子还在墙上挂着。(BCC)

[しかし上着と帽子はまだ壁に掛かっている。]

b. 孩子们在圣诞树上挂着装饰品。

[子供たちはクリスマスツリーに装飾品を掛けている。]

例(39)は、形式から見れば、aとbの基本構造はどちらも「S＋在＋場所＋V」であるが、aは、「Sがある場所に存在する」という意味が含まれているのに対し、bは動作行為だけが描写されており、存在のニュアンスは含まれていない。また、以下の例(40)のような場合は、Sが動作主でありながら存在の主体でもある。本稿で取り上げるD語順は、例(39a)、例(40)のように「存在」のニュアンスが含まれる文のことである。

(40) 一丝丝流云在天空飘动着，……(BCC)

[ほのかな雲が空を漂っている……]

齐沪扬(1994)では、B語順に変換できるか否かによって、D語順のような構文を静態存在文に使用される「V＋着₁」と、動態存在文に使用される「V＋着₂」に分けられており、後者のほうがB語順に変換できないとされている。即ち、動詞に求める条件において、D語順はB語順より少ないことが示唆されている。しかし、すべての動詞がD語順に用いられるというわけではない。例えば、宋玉柱(1988)では、“写”のような静態存在文に使

用される動詞はD語順に用いることができないとされている（表5参照）。

表5

NP ₁ +動+着+ NP ₂ (A語順)		(有)NP ₂ +在+ NP ₁ +動+着 (D語順)	
静態存在文	a類	(5) 床上躺着一个人	+
	b類	(6) 墙上挂着一幅画	+
	c類	(7) 墙上写着两个字	-
動態存在文		(8) 大街上跑着两辆汽车	+

(※表1の一部を再掲)

“挂”のような、D語順に用いられる他動詞は、さらに以下の例(41)～(43)の“放”、“扔”、“貼”などが挙げられる。

- (41) 一杯冷饮也在桌子上放着, ……。(BCC)

[冷たい飲み物もテーブルに置かれている……]

- (42) 空酒碗在炕上扔着。(BCC)

[酒を飲んだ時のお碗もオンドルの上に転がっている。]

- (43) 宣传婚姻法的挂图在乡政府门口的墙上贴着。(CCL)

[婚姻法の宣伝画が村役場の入り口の壁に貼られている。]

D語順に用いられるこれらの他動詞は、「動作を行った結果、主体が存在する」という「結果の残存」の意味を表すだけではなく、いずれも「非継続性」を持つ瞬間動詞である。動詞の前に「在+P_{発生場所}」を加えても「動作の継続」を表さず、動作の結果として主体の残存状態しか表すことができない。一方で、“写”、“刻”などのような他動詞は、「主体が存在する」という動作行為の結果を表すことも可能であるが、「継続性」を持つ他動詞であるため、形式が能動文に似ているD語順に使用される場合には、動作行為が続いているという動的な状態を表す意味が機能しやすくなると考えられる。

D語順は、働きかけの意味が含まれていない自動詞と、動作の結果として存在状態を表すことができる瞬間動詞あるいは結果動詞を使用する傾向があるといえる。もちろん、“写”、“刻”など「継続性」を持つ他動詞は、まれでありながら以下のようにD語順に使用される例文もみられる。

(44) 但交渉の結果就在警察冷酷的脸上写着。(CCL)

[しかし交渉の結果はその警察の冷酷な顔に書かれている。]

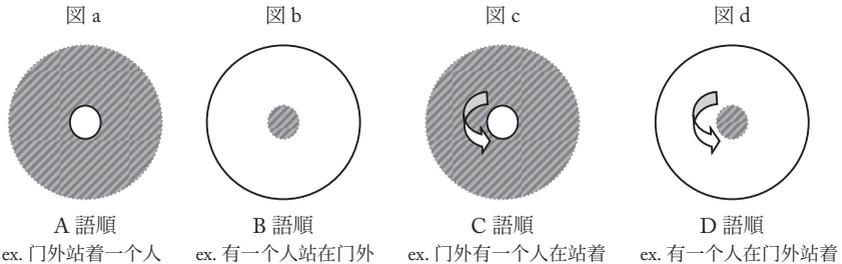
(45) 一生的运命，都在头盖骨上刻着。(BCC)

[一生の運命は頭蓋骨に刻まれている。]

しかしながら、例 (44)、(45) の描写対象である“交渉の結果”、“一生的运命”は、目に見えず、実体のない抽象的なものであり、動的な状態を連想しにくいため、D語順で用いられるのである。

終わりに

本稿で取り上げた四つの語順は、同じく「存在」を表すことができるが、それぞれの捉え方が異なる。「存在文」であるA語順は、以下の図 a で示すように、P場所位置が背景化されており、T描写対象が前景化される認知の主体である。それに対し、B語順（「T描写対象＋A動作行為＋在＋P場所位置」）ではT描写対象が背景化されており、P場所位置が前景化され、A語順の「地」と「図」が反転して捉えられているといえる（図 b）。C語順（「P場所位置＋T描写対象＋在＋A動作行為＋着」）は、A語順と同じく、P場所位置が背景化されているが、前景化になっているのはT描写対象だけではなく、存在の進行状態（A動作行為）も前景化しているのである（図 c）。D語順（T描写対象＋在＋P場所位置＋A動作行為＋着」）は、B語順と同じくT描写対象が背景化されているが、P場所位置と存在の持続状態を表すA動作行為は前景化されている（図 d）。



また、動詞が「動態存在文」と「静態存在文」に用いられるか否かの観点だけでは、述語の意味特徴及び各語順の生成条件を説明することができない。語順の違いによって、述語の意味機能も同じではないため、成立条件として述語に対する制約もそれぞれ異なるのである。A語順の述語は「存在義」だけが求められており、「存在義」のニュアンスさえあれば成立する。B語順の述語は「附着時の状態」を表すため、先行研究でも指摘されているように「附着義」も求められる。しかし、第2節の分析でもわかるように、「附着義」を持つ動詞は三種類あり、それぞれの意味特徴によってP場所位置との整合性もA語順と異なる特徴を呈している。また、C語順の述語は、動作・状態の持ち主の「存在の進行状態」を表すため、「他動性」のない「状態義」が求められるが、進行を表す副詞「在」がないC語順では「他動性」の強い動詞が用いられても許容度が高くなる。D語順の述語は、「存在の継続状態」を表しており、「他動性」のない「状態義」あるいは「瞬間性」を持ちながら「結果残存義」を持つことが要請される。

付記：本稿はJSPS 科研費（課題番号：19K13192）の助成による研究成果の一部である。

参考文献

- 范方莲（1963）《存在句》，《中国语文》第5期，pp.386-395。
方梅（2011）《从“V着”看汉语不完全体的功能特征》，《语法研究与探索》（精选版），中国语文杂志社，pp.337-349。
李莉华・熊学亮（2020）《也谈汉语存现句中动词的非宾格性》，《东华大学学报（社会科学版）》第20卷第2期，pp.186-189。
聂文龙（1989）《存在和存在句的分类》，《中国语文》第2期，pp.95-104。
陆俭明（1993）《八十年代中国语法研究》，商务印书馆。
齐沪扬（1994）《“N+在+处所+V”句式语义特征分析》，《汉语学习》第6期，pp.21-28。
任鹰（2005）《现代汉语非受事宾语句研究》，社会科学文献出版社。
宋玉柱（1982）《动态存在句》，《汉语学习》第6期，pp.9-14。
宋玉柱（1988）《略谈“假存在句”》，《天津师大学报》第6期，pp.86-89。
隋娜・王广成（2009）《汉语存现句中动词的非宾格性》，《现代外语（季刊）》第32卷第3期，pp.221-230。
尚新（2009）《汉语体系统内部的概念空间化配置对立—以“在”和“着”为例》，《语言科

- 学》第8卷第2期, pp.165-171.
- 石毓智 (2006) 《论汉语的进行体范畴》, 《汉语学习》第3期, pp.14-24.
- 王永利・韩景泉 (2015) 《特征分析下存现句的非宾格性》, 《中南大学学报(社会科学版)》第21卷第1期, pp.257-262.
- 杨素英 (1999) 《从非宾格动词现象看语义与句法结构之间的关系》, 《当代语言学》第1卷第1期, pp.30-43.
- 朱德熙 (1962) 《句法结构》, 《中国语文》第8期, pp.351-360.
- 朱德熙 (1981) 《“在黑板上写字”及相关句式》, 《语言教学与研究》第1期, pp.4-18.
- 朱德熙 (1982) 《语法讲义》, 商务印书馆.
- 祝东平・祝郝 (2012) 《从韩语时间感知方式看“在”与“着”的语义差别》, 《汉语学习》第6期, pp.12-20.
- 謝平 (2021) 「存現文のNP₁についての一考察」『九州中国学会報』第59巻, pp.90-76.
- 平山邦彦 (2017) 「中国語語順体系に貫かれた構成原則に関して—基本語順の設定とその核心的SVOの位置づけを中心に—」『拓殖大学語学研究』第137号, pp.57-100.
- 丸尾誠 (2005) 「『付着』という概念—中国語の“在+L+V”形式と“V+在+L”形式を例として—」『多元文化』第5号, 名古屋大学国際言語文化研究科, pp.299-309.
- 雷桂林 (2008) 「不定名詞主語文の場面描写機能」『中国語学』255号, pp.137-156.

例文出典

BCC 语料库 (<http://bcc.blcu.edu.cn/>)

CCL 语料库 (http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/)

謝平 Xie Ping 福岡大学人文学部准教授 専門：中国語学